

放流技術開発調査（ヒラメ）

上原子 次 男・田 中 俊 輔・早 川 豊
藤 田 修 央・松 本 昌 也

発 表 誌 名

昭和62年度放流技術開発事業報告書（日本海ブロックヒラメ班）、昭和63年3月、P36～65

抄 録

- (1) 本年の天然ヒラメ着底期は7月中旬と思われ、去年より2旬程早かった。
- (2) 稚魚の着底尾数は、 $1 \times 10^3 / \text{m}^2$ 尾と推定され、59年の約1/130と極めて少ない値となり、次年度以降の漁獲動向が注目される。
- (3) 今後の大量放流にあたっては、1才魚の時期的分布場所及び分布密度をも考慮すべきである。
- (4) 56～60年の5カ年のアミ類分布量の時期別変動によれば、分布量のピークは8月で、9月以降激減する傾向にあった。また、毎年の出現種類にはほとんど変化はない。
- (5) ヒラメ稚魚の餌料転換サイズは、年によって異なる。
ヒラメ稚魚にとって最も基本的な餌料はアミ類であるが、アミ類の分布量は毎年ほぼ安定しているため、その年のシラス類の多少が転換サイズを左右しているものと推測される。
- (6) ヒラメ稚魚は、日の出前後にアミ類と魚類を、日没前後に魚類を摂餌しているが、水域のアミ類シラス類の分布密度差により変化する。
- (7) 全長3.5cm以下のヒラメ稚魚は、大きなサイズ（体長10mm前後）のアミ類を摂餌していない。
シラスを摂餌する最小サイズは3cmであり、着底直後から3cmまでは摂餌能力が十分でないと思われる。
- (8) 人工種苗の再捕例では、放流後2年経過しても最大移動距離は50kmで、移動は狭い範囲にとどまっている。
- (9) 61年放流群は、放流後13ヵ月で全長約30cmに成長している。
- (10) 鯨ヶ沢市場での定置等（底曳を除く）による漁獲量は約29トンで、このうち10.4%が体色異常魚であった。体色異常部位は、胸鰭基部、鰓蓋部周辺及び尾鰭に多かった。
- (11) 体色異常魚、正常魚の全長と体幅の比率からは、人工魚と天然魚の判別は不可能と思われる。